



神学の自由と出版の使命

石脇慶總

昨 1997 年、スリランカ出身の神学者が、第二バチカン公会議後初めてローマから破門罰に処せられた。日本の教会関係者、特に神学者たちの間でどのような反応があったのか、筆者は、寡聞にして不案内であるが、海外ではかなり問題となっているようである。どのような学説が、処罰の対象となり、どのような過程を経て破門されたのか、伝聞以外一切の情報は、筆者の手許にないので、この事件そのものについての判断は、差し控えたい。しかし、どのような理由があるにせよ、教会の中で、神学者が、その学説の理由で、破門罰という権力の発動を蒙るのは、「異邦人の間では、... 偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、... 来たのである。」(マルコ 10:42-46)と言明されたイエスの精神にそぐわないのではないか。確かに、主観的には、教会権力は、イエスが批判された権力とは、異質のものであろう。また、教会も人間の集まりであるという要素がある以上、ある種の強制力を持つ必要があろう。

しかしそれにしても、公開の対話への消極的な態度と、いきなりのように見える処罰は、少なくとも世に対する「あかし」の面では、プラスとはならないであろう。教会に与えられたカリスマの一つである教導権は、別の諸カリスマの自律性を可能な限り具体的に尊重すべきはずである。特にカリスマとしての神学の営みについて言えよう。神学が「学」である以上、その正否の基準は、最終的に自明性に還元可能な真実であって、それ以外の「効用」ではない。たとえ誤謬の可能性は常につきまともしていても、ある神学説の正否は、真実の観点から判断されるべきであって、何かにとって都合が良いとか悪いとかであってはならない。万一、ある神学説が、既存の信条を否定するように見える場合、なすべきことは、権限によるその説の断罪ではなく、その説自体に対する徹底的な神学的究明と、時によっては、否定されているように見える信条自体の再解釈の努力である。このような営みが、真摯に、かつ公然となされるならば、仮に時間がかかるとしても、信仰の真理は、必ずより明白になるはずである。何故ならすべての真実は、唯一の真理の本源である神から出るものであり、神の霊である聖霊に導かれているからである。

もちろん、このことは、神学は、真実による他は何らの制約も受けないと言う意味ではない。特に神学者は、人間共同体の一員であるから、様々な面で、規制を受けるのはやむを得ない。その発言や発表は、賢明でなければならない。しかしこのことは、神学自体の自律を損なうものであってはならない。ところで、この自律は、現実の場では、自然に確保されるものではない。努力して擁護しなければならない。従って、神学者の最も重要な任務は、「護教」ではなく、この自律性の擁護でなければならない。この観点から重要な役割を果たすのが、出版・図書である。焚書坑儒の昔から権力は、即効性のある処置を好む傾向にある。カトリック教会においてさえ、「禁書目録」なるものが廃止されたのは、つい一世代前のことに過ぎない。カトリック大学図書館、特に「カトリック文庫」の使命は、ただ書籍類を収集保管するだけでなく、神学の自律性の積極的な擁護に資することでなければならないであろう。

(Yoshifusa ISHIWAKI : 前宗教文化研究所第二種研究所員)

布教用要理解説図版について

山辺 美津香

はじめに

昨年5月、本学元職員眞野和夫氏を通じて木村咲子氏（聖母カテキスタ会）より、大変興味深い資料の寄贈を受けた。それは、絹に描かれた原画をポスターサイズ（ﾀﾞｲ 77×ｺﾞ 53cm）に複製印刷したもので、そこにはキリスト教の信仰と聖書の著名な場面が、中国の風俗を巧みに取り入れた形で描かれている。絵の下部には場面を表す言葉とその注解、そして聖書の出典が中国語で記されている。総数 35 枚で、一部変色した個所も見受けられたが、全体に明るい色調で統一された美しいものである。ただ、この複製画を解説する資料がないため、いつ、どのような目的で作成されたものなのかなどは不明である。また、この複製画のまとまりとしてのタイトルも見出せず、苦し紛れに「布教用要理解説図版」と仮に命名をしたのが実状である。

多くの宣教師が様々な困難を乗り越えてアジアの布教に尽くされたと同様にこの資料もまた想像以上にたくさんの人々の手を経て、私たちのカトリック文庫に寄せられた事を思えば、正確な情報をできる限り収集し、将来に残すことがひとつの使命であるとの思いで、さっそく調査を開始した。

最初の手掛かりは「1940年代に淳心会の神父が中国から持ち帰られた」という木村氏より伺った入手の経緯と資料より判明した作者名（王肅達）、印刷は輔仁大学（北京）であるという3点のみであった。中国で布教活動に携わっておられた方々を探し、多くの方に助言をいただきながらの、まさに手探りの作業である。幸い、神言会と輔仁大学との関わりが深いこともあり、意外に身近なところから得られた情報が次の手だてを導いてくれた。以下にこれまでの調査で判明したことを報告する。

中国におけるカトリック美術

この資料を目にして一番興味深かったのは、聖書の逸話を題材にしながらか、そこに描かれた人物、背景、そして色彩などがすべて中国様式とでも言おうか、これまで慣れ親しんだ西洋風の聖画像とは異なった雰囲気統一されていることであった。

中国布教の近代的先駆者といわれるマテオ・リッチはヴァリニャーノの「中国の文化を理解し、その文化に適合した布教を行う以外にない」という布教方針と布教政策（イエズス会特有の「適応主義的布教方法」と言われる）の下に、その活動を推進した。また歴代の教皇が中国人の司教及び司祭育成をその一貫した政策としたことともあいまって、中国の教会は外来的布教事業であるという性質を徐々になくし、中国人の司祭や修道者に指導される中国生来の教会の成立を目指すという方向性を生み出したと言える。芸術の分野においてもこの政策が活かされた。個々の試みにおいては、典礼のために中国固有の芸術を適用しようという原則が主張されたとの記述がある。中国風に翻案された今回の資料も中国様式のキリスト教芸術としての試みと見るべきであろう。

輔仁大学の中国キリスト教絵画

Fritz Bornemann 著 “Ars Sacra Pekinensis : die chinesische-christliche Malerei an der Katolischen Universität (Fu Jen) in Peking” に、今回の作者王肅達他、陳縁督など計7名の画家の作品とともに、当時の輔仁大学の活動が紹介されている。当時の輔仁大学では美術を専攻する学生たちにこうした絵を授業の一環として描かせるということが行われていたようである。

作者王肅達については、次のように記されている。1911年北京に生まれ、幼少の頃より絵を描く才能を発揮していた。16歳で商業学校に入学し、一時絵を描くことを中断していた時期

もあるが、21歳の時、再開する。絵についてはほとんど独学であった。まもなく北京美術家協会の会員となる。この協会の斡旋で国の内外の展覧会にかなり多数の絵画を出品した。陳縁督の薦めもあって1933年輔仁大学美術学科に入学。ここで Br. Berchmans Brückner, S.V.D.の勧めに従い、1934年のクリスマス展覧会のために初めてキリスト教絵画を描いた。1936年卒業後、輔仁中学校の美術教師となる。1937年受洗し、霊名は George (喬治)となる。それから専らキリスト教絵画を描くようになった。1939年、Msgr. Thomas Megan, S.V.D.に招かれて河南省新郷県にてこの一連35枚のシリーズを制作したとのことである。3年後、北京の輔仁に戻り、中国キリスト教芸術の発展に貢献した。

私は美術に関してまったくの門外漢であるため、その技法や絵画としての価値、美術的な位置付けなどはわからない。しかし、西欧の様式をそのまま踏襲するのではなく、中国独自の画風によって制作された聖画像の役割、さらにこれらの絵を印刷した意図を想像すると、中国人による中国人のための布教用資料としての意義が浮かび上がってくる。残念ながら、印刷の経緯や印刷部数はまだ解明できていない。

輔仁大学について

輔仁大学は北京のカトリック大学(私立北平輔仁大学)であった。教皇ピオ十一世の要請に応じた、アメリカのベネディクト会によって1925年10月1日創設され、1931年に南京中央政府によって正式に大学として認可された。当初は文学部(文学院)のみでスタートし、1929年に理学部(理学院)および教育学部(教育学院)を増設した。1933年教皇庁によって神言会に委譲された。

日中戦争の困難な期間(1937~1945年)にもその活動を進展拡張することができ、1937年大学院を開設、1938年中国人司祭養成のため神学院を設けた。1946年には農学部(農学院)が増設され、大学図書館(蔵書数144,000冊)、民俗博物館(東方博物院)を併せ持つ大規模な教育機関となった。1929年以来男子中学校、及び1932年以来女学校が大学に併設されて、これらを含む1948年の学生総数は2,383名であった。

共産主義政権の支配以来(1949年)大学は共産党の政治的宣伝活動の拠点となってしまい、次第に困難な状況に陥った。1950年10月、本来の目的を遂げられないことが確実となったため神言会は経営費の出費を拒否せざるを得なくなったので、大学は共産主義政府によって接收され、1952年5月19日公式に閉鎖された。

1956年に、その10年前から台湾で同窓会の集まりを持ち始めた会員が中心となり、大学を台湾に再建しようという構想が持ち上がった。彼らの願いを受けた教皇ヨハネ二十三世の働きで、1960年イエズス会、神言会、中国司教団は協同で台湾に輔仁大学を再建することに同意した。文部省の認可を得て、1961年に台北にまず哲学の大学院を開校し、1963年秋に教養学部、自然科学部、法学部を設立した。以後の輔仁大学(台湾)の発展についてはここでは割愛する。

当時、中国で布教活動に携わっておられた方々の話を伺う限り、中国から引き上げる際には、ほとんど何も持ち出すことが許されなかったとのことである。輔仁大学(北京)は今も北京師範大学となっているようであるが、昔の面影はほとんど残っていないという話も聞いた。しかし、あの膨大な図書資料や博物館の資料、教材などはその後どうなったのだろうか。絹本に描かれたと思われる原画は、どこかに保管されていないだろうか。念のため台湾の輔仁大学に問い合わせたが、未だはっきりした事柄は不明である。

その他の要理解説図版

1998年3月、聖母カテキスタ会(名古屋本部)より同様の資料を多数寄贈いただいた。驚いたことにこの中には前述の複製画を軸に仕立てたものも含まれていた。便宜上、出版された国別に仕分けてみると7カ国にのぼる膨大な資料である。サイズもポスターサイズから横長のものまで様々である。その概要については、「各国の布教用要理解説図版」として本稿

の末尾にまとめたが、聖書を題材としながら、独自の画風に翻案したものは中国版のみである。日本版（日曜学校協会発行）の中にわずかに日本の風俗を取り入れたものが1枚だけ見受けられた。しかし、キリストの風貌はあくまで西欧風に描かれている。それだけに中国版の資料は異彩を放っている。

中国版資料の調査と並行して、アメリカ版と日本版の整理作業を開始した。この2種類の資料には、中国版と同様に聖画像の他にそれぞれ英語、日本語による注釈や聖書の語句が書かれているため、比較的内容の理解がしやすいと判断したためである。その他画面に記された情報は、意味は不明であるが何らかの整理番号らしき数字、時折見られる画家の署名、複製印刷後に付されたと思われる通し番号などごく限られたもののみである。それらをできる限り正確に記録することを基本に作業を進めている。こうして各国の資料を比較することができた幸運を感謝したい。

ヨーロッパにおいては16世紀において、民心説得、布教のための重要な戦術として版画などの複製メディアを駆使したとのことであるが、中国や日本など東洋布教においても同様の手法が取り入れられているように思われる。宣教師がどのような図像をその地の民衆にもたらそうとしたのかという視点も重要である。「絵は説教と同じである。教え、説教し、感動させる。ことばよりもたやすく心に浸透し、行動させる」というポローニヤの司教の言葉は示唆に富む。

終わりに

現在までに中国版の資料は、すべて複製ながら軸装様式を含むカトリック文庫の2セット、聖母カテキスタ会（名古屋本部）の1セット、さらにW・ダンフィー師からの情報により、SVD House (USA, Techny) にも部分的に保存されていることが判明した。この他にこうした資料に関する情報をご存知の方はぜひご一報頂きたい。

天理図書館の澤井勇治様には、同館所蔵の中国版画についての文献を通じて貴重なご意見を頂いた。また、Sr.トマ、Sr.パチフィカをはじめ聖霊会のシスター方には、中国での宣教活動の様子や当時の貴重な記録を快く提供していただいた。その他様々な形で多くの方に助けを頂いた。末筆ながら、記して感謝申し上げたい。

なお、中国版の継続調査の他、各国の図版についての調査という新たな課題を背負い、ますます関係諸氏のご指導とご協力をお願いする次第である。

(Mitsuka YAMABE : 図書館事務課)

参考文献

上智大学編著『カトリック大辞典』富山房 1942年

矢沢利彦著『中国とキリスト教』近藤出版社 1972年

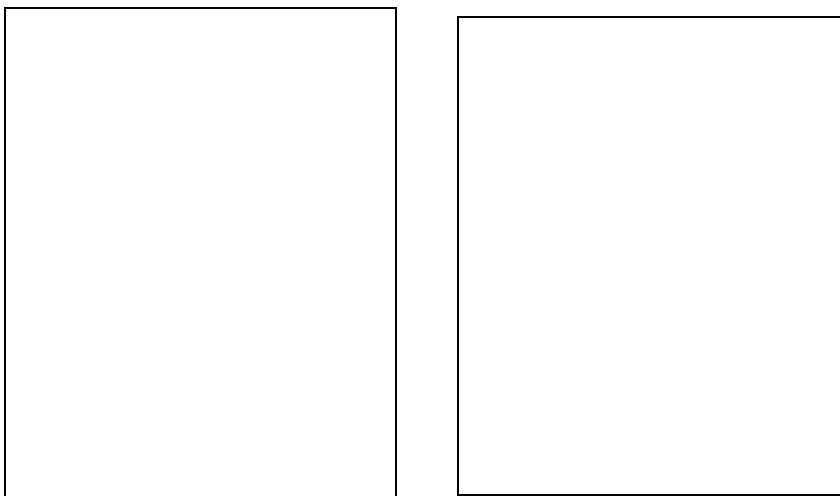
Bornemann, Fritz "Ars Sacra Pekinensis : die chinesisch-christliche Malerei and der Katolischen Universität (Fu Jen) in Peking" Verlag Missionsdruckerrei St. Gabriel 1950

若桑みどり「天草版『ヒイデスの導師』(一五九二年刊)扉絵「不信のトマス」の図像源泉とその意味 対抗宗教改革芸術の東漸その[一] キリシタン文化研究会会報 110号 1997年11月

各国の布教用要理解説図版


1. 中国版
王肅達 画 北京 輔仁大学 1939年
軸 34本
35枚 (complete)
2. フランス版
Catéchisme en images. - Paris : Maison de la
Bonne Presse.
軸 17本 71×48 cm 絵(64×47)

(No.1,2,3,5,7,11,12,13,16,19,20,21,22,32,34,41,50)



(中国版)

3 . アルゼンチン版

Laminas Catequisticas /  ubiau 画 - Buenos Aires : Junta
Abquidiocesana de la Doctrina Cristiana del Arzobispado de
Buenos Aires.

196 枚 71×54.5 cm 絵(51.5×38.5)

(No.1-118,120-188,190,192-194,196-200)

4 . スペイン版

I. N. Heineman 画

23 枚 36×44 cm 絵(30.5×36)

5 . ドイツ版

Düsseldorf : Mosella-Verlag, 1913

軸 49本 55×80 cm 絵(45×71)

(No.1-8,10,12-29,31,34,36,38-40,43-47,49-50,52-60)

軸 27本(12種) 79×55.5 cm 絵(70×47)

(No.9×2, 11×3, 30×2, 32×2, 33×2, 35×3, 37×3, 41×4,
42×2, 46×2, 48, 51)

München : ARS Sacra, Josef Mueller, 1930年代

軸 24本 78.5×82.8 cm 絵(60×79.5)

軸 13本 94.5×62 cm 絵(80×60)

M. Mink-Born 画 - Stuttgart, Hermann Appel

17枚(11種) 59.5×89.5 cm 絵(49.5×79.5)

(No.18×2, 23, 25, 69×2, 86, 88×2, 92×2, 103,144,145×2,
146×2)

6 . アメリカ版

Effingham, III. : CO-OP Parish Activities Service

軸(13枚綴り)20本 (260種)

82×53 cm 絵(57×47.5)

7 . 日本版

日本日曜学校教会発行 1950-60年代

164枚 78.5×52 cm 絵(58×48)

絵 (originally published : Standard Pub. or J.S.S.U.)

No.1501-1726 (欠多し)

日本におけるカトリック要理の歴史を辿る

伊藤 敦子

プロテスタントは日本での布教のために聖書の和訳に力を注いだが、カトリックは教理・典礼・祈祷文を中心として布教活動を行ってきた。それは弾圧時代の潜伏キリシタンを帰正させるという已むに已まれぬ理由からだけでなく、ザビエル以来の伝統とも呼べるものである。歴史の大きなうねりに翻弄されながらも布教を続けた、宣教師達の足跡を辿るという意味を込めて、これから暫く要理書の歴史を遡ってみたい。

はじめに

< 公教要理とカテキズム >

カテキズムという言葉はギリシア語の“katecho”(口頭で教えるの意)に由来する。古代教会では、問答式に受洗志願者の意志を確認する洗礼直前の準備もあったが、教理の内容は簡潔に要約した形で教えられており、これは中世にも受け継がれ、様々の要理教育書が現存している。要理問答書(=カテキズム)は信仰問答とも呼ばれ、洗礼または堅信志願者に信仰の真理を教えるために用いられる問答体の文書を意味し、カトリック教会では公教要理と呼ばれる。ルターが教理を問答式に総括した書物をカテキズムと呼んだことから、カトリック教会でも16世紀後半に新たに問答式で作成した要理書を、一般的にカテキズムと呼ぶようになった。

< カテキズムの変遷 >

宗教改革によってカトリック教会と袂を分かったプロテスタント諸教会では、ルターの教理問答(1529年)やカルヴァンのジュネーヴ教理問答(1542年)などが次々に出版され、学校におけるキリスト教教育や家庭礼拝に広く用いられた。中でもルターの教理問答は十誡・使徒信条・主祷文・典礼を取り扱い、やがてルター派教会の標準書となり現在に至るまで用いられている。カトリック教会においても、プロテスタント諸教会の教理問答教育の実際を見て重要性を感じたカニシウス(Petrus Canisius, S.J.)が、『キリスト教々理摘要』(Summa Doctrinae Christianae, 1556年)を公にした。それはヨーロッパ各国語に訳され、様々に改訂されながら今日に至るまで、カトリックの主要な教理問答(=公教要理)となっている。

他方、宗教改革に対応して開かれたトリエント公会議においても 1546 年以来カテキスムス編纂の議が起こり、1563 年に『ローマ・カテキスムス』(Catechismus Romanus)と呼ばれる綱要が制定され、1566年 に出版された。それは司祭の説教や教理問答教育における教職の一助とされたが、前者ほど一般的にはならなかった。このような公教要理は、プロテスタント諸教会の教理問答に対抗して伝統的教理を簡潔にまとめ、信徒に暗誦させ強い意志で守り抜かせる事を目的としていたので、内容は大別して、“信ずべきこと”、“守るべきこと”、“恩恵を受ける方法”の三つから構成されていた。

日本における公教要理の変遷

< キリシタン時代 >

・ ザビエルの系譜

前述したように公教要理は中世以来カトリック教会で編せられ、教えられてきたが、日本にキリスト教が伝えられた時には、新しく発見された異教国の諸民族を対象とした、然るべき書がなかったと言ってよい。しかし、東洋とりわけ日本において全く異なった宗教思想に対処し、しかもそれらの宗教的概念を媒介として教理を伝達するためには、標準的な教理書の編纂は緊要事であった。1540 年の創立以来教理教育に主力を注いできたイエズス会の、創始時以来の会員であるザビエル(Francisco de Xavier, S.J.)は、逸早くその必要性を悟り、

前述したカニシウスが『キリスト教々理摘要』を編する10年程前にマラバル、テルナーテ及びマラッカにおいて公教要理の作成を試みている。それはバルシュ(João de Barros)の教理書を訂正し 29ヶ条にまとめたもので、それ以後ザビエルの宣教の基礎となり、各国語に翻訳された。不幸にして彼の編した日本の公教要理は現伝しないが、それは使徒信経を中心として 1547 年に先ず小さな形(=小ドチリナ)で作成され、それにより最初の日本人信者ヤジロウが教育を受けた。1549 年の鹿児島上陸後、布教活動を進めるかたわら、本格的な教理書の編纂の必要性を痛感したザビエルは、天地創造からキリストの託身・生涯・昇天、そして最後の審判に至る要理書(=大ドチリナ)を編した。それを既に日本語に習熟していたフェルナンデス(Juan Fernandes, S.J.)とヤジロウとが協力して和訳した。1549 年の冬から翌年春にかけてのことであった。しかし、そこで用いられた宗教用語はほとんど皆仏教用語であって誤解を招きやすく、翻訳文も未熟であったため、後には使用を禁じられた。

1552 年に来日したガーゴ(Balthazar Gago, S.J.)は、キリシタンとなった仏僧に助けられつつ、ザビエルの小ドチリナを改訂し、1555 年に 25章から成る教理書『二十五ヶ条』を編したが、ここでは多くの宗教用語をラテン語やポルトガル語の発音で使用し、原語主義が導入されている。それは、翌年管区長ヌニェス(Belchior Nuñez, S.J.)によって改訂され、同宿¹⁾ロレンソの援助で和訳され、1570 年にカブラル(Francisco Cabral, S.J.)が編した教理書が使用されるまでの正式な教理書となったが、両者とも現存しない。

・ドチリナ・キリシタン

1570 年に来日して間もなく布教長となったカブラルは、新たな教理書の編纂を指示した。その際底本となったのが、1560 年にポルトガルでジョルジェ(Marcos Jorge, S.J.)によって編成され、今世紀の初めまで数十版を重ねてポルトガルにおいて公式のテキストとして使用されていた『ドチリナ・キリシタン』"Doctrina Christam"であった。しかし原書は幼児洗礼を受けた児童を対象とした教材であるのに反し、日本のドチリナは成人した洗礼志願者の手引となるものであったため、翻訳と同時にそれを実状に合わせる必要が生じた。日本のドチリナは教理知識を深め信仰を実践するのに必要な条々を取り入れ翻案されたのである。それは 1590 年の活版印刷機舶載とともに『ドチリナ・キリシタン』として出版されるまで、絶えず増補や訂正を加えられ、写本のまま日本各地に広まっていった。

1579 年に巡察師として来日したヴァリニャーノ(Alexandro Valignano, S.J.)は、1580 年から翌年にかけて『日本のカテキズモ』を編し、日本人イルマン²⁾らの教本として、1586 年リスボンからラテン語で出版した。これは教理指導者達の手引書というだけでなく、日本の宗教批判においても優れたキリシタン思想書となっている。

1590 年に再来日したヴァリニャーノは、持参した印刷機を加津佐のコレジヨに据えさせ、先ずグラナーダ(Luis de Granada, O.P.)の『信経序説』の抄訳である『サントスの御作業』(1591年刊)と題する聖人伝を出版させた。ヨーロッパから舶載された活字はローマ字のみであったためこの聖人伝はローマ字本であった。その後ひらがなの活字が作られ、1591 年に日本文の『どちりいな・きりしたん』(現ヴァチカン図書館蔵・天正版国字本)を印刷させた。その後 1592 年のコレジヨの移転に伴い印刷機も天草に移され、そこで宣教師用のローマ字本(現東洋文庫蔵・天正版ローマ字本)とグラナーダの『信仰要義序説』の抄訳である『ヒイデスの導師』のローマ字本が出版された。1592 年の「第一回日本管区会議」においてこの『どちりいな・きりしたん』が正式に認められ、以前使用された種々のテキストの利用が禁じられた。また、1600 年長崎において『どちりいな・きりしたん』の国字本(現カサナテンセ図書館蔵・慶長版国字本)とローマ字本(現水府明德館蔵・慶長版ローマ字本)二種の改訂・増補版が出版されている。また「異本どちりいな・きりしたん」とも呼ぶべき、問答体でない『^{きりしたんこころえがき}吉利支丹心得書』(1628年刊)も写本で伝えられている。

その他に日本人イルマン・ハビアンによって 1605 年に『妙貞問答』が著された。それは司祭から直接教えを受けられぬ由緒ある女性等を対象に、妙秀尼とキリシタン女性幽貞との問

答体という形式を採っている。そこでは『日本書紀』を始め日本の伝統思想の不合理性が鋭く批判されており、近世的かつ合理的批判精神の魁として注目される。

しかし、キリシタン時代のこれらの教理書は師弟の問答形式にはなっているが、異教からの改宗者を主要な対象としており、いずれもカニシウスの教理問答書や『ローマ・カテキスムス』とは異なっている。信徒の青少年を対象とする欧米の問答式カテキズムが導入されたのは、明治時代以降と言ってよい。

(Atsuko ITO:図書館事務課)

- 1)元来は仏教用語で同宿者または同泊者の意味であるが、ヴァリニャーノによって当時教会内部にあってそれに相似した存在の者に対する呼称として採用された。その多くは、修道士及び聖職者となるための教育を受けた人を指している。
- 2)兄弟の意で、修道会員を意味する。キリシタン時代のイエズス会では、司祭に叙階されない修道士を意味した。

参考文献

- 海老沢有道他編著 「キリシタン教理書」 (教文館)
 海老沢有道・大内三郎共著 「日本キリスト教史」 (日本基督教団出版局)
 海老沢有道他編著 「日本キリシタン史」 (塙書房)
 「日本キリスト教歴史大事典」 (教文館)
 亀井孝他著 「日本イエズス会版キリシタン要理 -その翻案および翻訳の実態-」 (岩波書店)

カトリック文庫新委員紹介

加藤久子(図書受入係)

興味がありながらも学ぶ機会がなかったため殆ど未知の世界ですが、よい機会に恵まれたと思い、前向きに取り組んでいきたいと思いをします。

近藤真由(閲覧・参考係)

歴史の中で大きな影響力として存在してきた宗教。時代をこえ、現代にいたるまで受け継がれてきたキリスト教の思想を少しでも理解できるよう、努力していきたいと思いをします。

汲田美智子(閲覧・参考係)

名古屋聖霊短期大学図書館に長く務めておりましたので、それなりにこの分野に就きましたは理解しているつもりでしたが、やはり蔵書の規模がまったく異なり又一から勉強したいと思いをします。

問合せ先：南山大学図書館 「カトリック文庫」フロア

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

ホームページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/dyuna/midashi.htm>

E-mail: library@ic.nanzan-u.ac.jp TEL:052-832-3163 FAX:052-833-6986 担当者:山辺

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリック第10号 1998.7.1発行 南山大学図書館「カトリック文庫」フロア

編集委員:三浦基,尾形裕司,近藤真由